

# 《楽曲解説》

解説＝船木 篤也

9/22 第869回オーチャード定期演奏会

サ  
ン  
ト  
リ  
ー

9/10

オ  
ヘ  
ラ  
シ  
テ  
ィ

9/11

オ  
ー  
チ  
ャ  
ー  
ド

9/22

## ベートーヴェン、シューマン、ブラームス

ブラームスの交響曲とくれば、いつも引き合いに出されるのがベートーヴェンである。早くも19世紀初頭に、きわめて個性的な交響曲を9つも書いた巨人、ベートーヴェン。「交響曲なんか書くのはごめんだ！ あの巨人が、自分の背後にいつも音を立てて行進してやってくる」。ブラームスは、自身の交響曲第1番・第1楽章の初稿を書き上げた時点で、なおそう言ったものだった。

それでも交響曲の創作を避け得ない課題としたのは、ベートーヴェンと彼のちょうど間に位置した恩師、シューマンの忠告も、大きく働いてのことであろう。

そもそも、ブラームスが20歳のときに、突如、音楽界の注目を集めたのは、シューマンの後ろ盾があったからである。1853年、ブラームスを激賞する記事を、「新しい道」と題して、有名な『音楽新報』誌に発表したのだ。そのなかで、ブラームスのピアノ・ソナタや室内楽曲を紹介しつつ、「合唱曲やオーケストラ曲といった規模の大きな作品においても力を発揮する」ことを期待したいとも述べた。この点をシューマンは、その後、自

身が精神を病んでからも——ライン川への投身自殺未遂は1854年2月——何度も強調している。

プレッシャーは大きかったに違いない。ブラームスは、シューマンの自殺未遂直後から、交響曲の創作を試みた。ピアニストで作曲家でもあった、シューマン夫人、クララほかと、意見を交換しながら。結局それは、ピアノ協奏曲第1番に結実したのだけけれど。

その後、「セレナード」第1番(1858)、同第2番(1859)と創作を続け、ブラームスは管弦楽法の腕を上げてゆく。「ドイツ・レクイエム」(1868)——ここで名声が一気に高まる——、「ハイドンの主題による変奏曲」(1873)ときて、1876年に、いよいよ最初の交響曲が完成した。ブラームスは43歳になっていた。

ぜんぶで4つあるブラームスの交響曲は、いずれも4楽章構成で、2管編成を基本とする。その点だけをみても、ブラームスはベートーヴェン・シューマン路線を引き継いでいるが、以下にみるように、シューマンが期待したような「新しい道」をも、この分野で獲得したと言えるだろう。

## ブラームス(1833-1897) 交響曲第3番 へ長調 作品90

- 第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ(約10分)
- 第2楽章 アンダンテ(約8分)
- 第3楽章 ポーコ・アレグレット(約6分)
- 第4楽章 アレグロ(約9分)

1883年の夏に、ドイツのヴィースバーデンで書かれた作品。初演は同年12月2日、ウィーンにて。

1883年といえば、「交響曲」の可能性はもう尽きたとして「楽劇」に新しい道を切りひらいた、かのワーグナーが世を去った年だ。当時、ブラームスの暮らすウィーンの楽壇は、ワーグナー派VSブラームス派に二分されていた。これはエドゥアルト・ハンスリック(ブラームス派)ら、おもに批評家が煽った対立であり、それゆえあまりに重要視するのは禁物なのだが、そうした雰囲気の中での曲がどんなにふうに響いたかを想像してみるのには、無駄ではなからう。

というのも、第1楽章のしょっぱな。ヴァイオリンで提示される第1主題が、シューマンの交響曲第3番『ライン』の、同じく第1楽章の第1主題とよく似ているのだ。

**譜例1** は、両者を上下に並べてみたもの。調性やメロディラインこそ違うものの、4度の跳躍下行で始まる所といい、その後の跳躍音程の広さといい、また何よりリズムが、そっくりだ。聴いていて体が自然と——譜面とは異なる——

3/2拍子を感じるように書かれている点など、シューマンをなぞったかのようだ。

ブラームス自身はこの主題を、南ドイツで耳にしたヨーデルから借用したものだと言ったらしいが、これは彼一流の韜晦であろう。本作が書かれたヴィースバーデンは、ライン川沿いの町。これにちなんで、恩師シューマンにオマージュを捧げたのに違いないのだ。

ワーグナー派の揶揄を受けるだろうこと必至の、ある意味で挑発的な信仰告白。この「交響曲継続派」への帰依を、さて、ブラームスはどう独自に展開してみせるのか？

### 第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ

交響曲冒頭には、**譜例1** に先行する3小節があって、そこで鳴る管楽器の動機「ファ-ラ-ファ」が重要だ。これは第1楽章の内部ばかりでなく、のちに終楽章でも聞こえてくる。このような、動機による楽章横断的な関連づけは、いかにもベートーヴェンやシューマンを感じさせるが、ブラームスが新しいのは、そこで鳴っているハーモニーをも、全曲のいわば要として利用してゆく点だ。「ラト」に付けられた和音がポイントで、これがあがあるために、長調の文脈において短調の色あいがにじんだようになる。この、長短調を揺れる不思議な感覚は、この後も本作のあちこちで聴かれるだろう。

### 譜例1

シューマン  
交響曲第3番  
第1楽章

ブラームス  
交響曲第3番  
第1楽章

**第2楽章 アンダンテ** クラリネットとファゴットが印象的な楽章。冒頭で両楽器が吹くたおやかな旋律が、第1主題。それがひとしきり展開したあと、やはり両楽器が吹く3連符をふくむ孤独なつぶやきのような旋律が、第2主題。この第2主題も、終楽章で大いに活用されることになる。

**第3楽章 ポーコ・アレグレット** 第2楽章と同様、室内乐的な音楽。3拍子による3部形式ではあっても、活発な舞曲系ではなく、親密な歌の連鎖となっている点が、伝統的な“第3楽章”と異なる。「歌」は楽器を替えてリレーされてゆく。

**第4楽章 アレグロ** 第1主題の静かな合奏で始まり、中低弦のピッツィカートで、いったんピリオド。その直後の第2楽章・第2主題の再現にご注目。これは本楽章なかほどのクライマックスで大々的に展開し、終盤のおだやかな場面では、第1楽章冒頭動機、および終楽章・第1主題とを綴りあわせる、重要な役割を担う。最後はシューマン『ライン』へのオマージュ主題が、かげろうのように立ちのぼって終る。

[楽器編成] フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部

## ブラームス(1833-1897) 交響曲第4番 小短調 作品98

- 第1楽章 アレグロ・ノン・トロppo(約12分)
- 第2楽章 アンダンテ・モデラート(約11分)
- 第3楽章 アレグロ・ジョコーソ(約6分)
- 第4楽章 アレグロ・エネルジーコ・エ・パッシオナート(約10分)

ブラームスの音楽はとてもロマンティックだ。本作でも、第1楽章冒頭に現れるヴァイオリンによる主題からしてそ

う。切れ切れのため息。嘆きの音調。

ところがこの主題、よくみると、きわめて頭脳的に作られているのが分かる。個々の音を並べてゆくと、最初は「シーソ-ミ-ド-ラーファ#-レ#」。音程が3度ずつ下がっている。いっぽうその続きは、「ミ-ソ-シー-レーファ-ラ-ド」と、こんどは3度ずつ上がっている(**譜例2**)。旋律が途中オクターヴを上下し折れ曲がるの

